木産連とおもしろ塾コラボ

木材利用の可能性考える

東北森林管理局長ら講演

「木材利用・森林整備と能代の可能性を考える」と題した講演会（能代市文化会館中ホールで）

能代木材産業連合会と市民おもしろ塾主催の講演会「木材利用・森林整備と能代の可能性を考える～行政中枢・技術研究第一線者による能代講演～」は23日、能代市文化会館中ホールで開かれ、木材関係者ら約70人が多様化する木材利用の可能性に理解を深めた。

林野庁東北森林管理局の大政康史局長は「東北の森林・林業・木材産業の今後を考える～林野行政マンから見た景色～」と題して講演した。

大政局長は、昔の木材利用は天井板や樽（たる）の製造などに限られていたが、最近は材質のいいA材を製材品に使い、加工技術の向上でやや曲がりのあるB材は集成材や合板、CLT（直交集成板）として使われ需要も拡大したと説明。原木の買い取り価格が最も安いC材もチップとして燃料になるなど木材は多様な使われ方をしており、「集成材や合板、人工乾燥製品のシェアが拡大し、需要の98％を並材が占めるようになった」と述べた。

ここ10年で国産材へのシフトが進み、製材用材と合板用材の国産材比率は約50％まで増えた。木造軸組住宅における国産材の使用割合も高まり、大手住宅メーカーは令和2年度48・5％、工務店は4年度57・5％と着実に増加。木造化の推進を公共建築物から建物全体に広げた「都市（まち）の木造化促進法」が3年度に成立したことで「小規模な非住宅建築物での木造率が上昇している」とした。

人手不足が深刻な林業は3Kのままでは人材が集まらず、安全・安心な雇用を確保する必要があるとし、「労働災害はコスト高に直結する。ネット環境の整備など時代に合わせた技術革新が求められる」と提言した。

県立大木材高度加工研究所の高田克彦所長は「秋田の未来に向けた秋田県立大学・木材高度加工研究所の挑戦」と題し、森の価値転換を通じた自立した豊かさの実現に向け、中山間地域における価値創造や環境親和型木質材料の開発、森とまちのカーボンストックの推進、伝統産業の継承と革新といった研究開発課題に取り組んでいるとした。

二酸化炭素（CO_2）を吸収するのは森林と海しかないといった特徴などを説明しながら、「木を切ると若返らせることができる。枯れる前に切って使うことが大事」などと述べた。